

# 死生学研究

2003年秋号

東京大学大学院人文社会系研究科

## 編集委員

◎島菌 進 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

一ノ瀬正樹 (東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

小佐野重利 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

熊野 純彦 (東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

○下田 正弘 (東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

竹内 整一 (東京大学大学院人文社会系研究科教授)

横澤 一彦 (東京大学大学院人文社会系研究科助教授)

◎CEO拠点リーダー ○本号編集担当

---

死生学研究 2003年秋号

平成15(2003)年11月25日 印刷

平成15(2003)年11月25日 発行

編集者 死生学研究編集委員会

発行者 東京大学21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」

(Construction of Death and Life Studies concerning Culture and Value of Life)

発行所 東京大学大学院人文社会系研究科

(東京都文京区本郷7-3-1 TEL. 03-5841-3736)

印刷所 株式会社キーワード

---

## 仏教の死生観

— 四つのテーマを巡って

ジャックリーヌ・ストーン

平成十五年七月四日、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部のもとで行われた「仏教の死生観」のワークショップに参加させて頂いた。その際、提題者として頼まれたのは正式な研究発表というよりも、デイスカッションの土台となる、インフォーマルな話であったため、私の最近の研究（日本中世の臨終行儀について）を出発点とし、それを通して日本中世に限らず、近代以前の仏教一般の死生観に共通する四つのテーマについて順に語り、そして最後に簡単に現代との比較対照にも触れ、かなり広く話させて頂いた。その内容は以下の通りである。

### 一 死は迷いの問題、悟りは死の克服

「死」という、最も不安な、そして誰も避けられない、根本的な問題に対して、仏教は安心を与えると、よく言われている。それを否定するつもりはないが、「死」という問題が先ず先にあり、それに対して仏教が解決を与えるというよりも、他の宗教と同じように、仏教は人生に対して独特な問題を提起し、その問題の中で「死」を位置づけた上ではじめて、死に対する解決を与えるのである、と強調したい。仏教の人生に対して提起された根本問題とはいうまでもなく、生死の事である。生きる事と死ぬ事との意味での「生死」ばかりでなく、迷いの領域・サンサーラの事である。人間が悟っていない限り、好きな事に対して欲望を起こし、嫌いな事に対して嫌悪

を抱き、迷った執着によって追われて或いは人界、天界に生まれたり、或いは地獄、餓鬼道に落ちたり、六道輪廻して、生死の苦しみを繰り返さなければならぬという、基本的な仏教の世界観はご存じの通りである。その迷いの世界の中、生老病死の四苦等の概念に見られるように、死とはサンサーラの象徴となる。それ故、仏教文芸上、利根の人、つまり、宗教的能力の優れた人は、死の様相を見るだけで無情の事を悟り、道心を起こすというテーマがよく見られる。釈尊がまだ太子であった頃、王城の門より外に遊びに出た時、葬列の中に運ばれた死体を見て、それだけで諸行無常の理を実感し、出家の動機となったエピソードはそのテーマの典型であろう。同じように道心を起こすため、仏教では「死」を対象とする色々な観法が伝わってきた。生まれるものは必ず死ぬという事を観念する抽象的な観法もあるし、または実際に三昧処に出て死体の腐敗を目の前で観じ、肉体への執着を断ち切り、無常を悟るといふ観法もある。

もし仏道修行が死への正しい認識に始まるとすれば、その達成は死の克服にあると言えるであろう。釈尊が菩提樹の下で悟りを開く直前に、その修行を妨げようとした魔羅王を打破した話は有名であるが、魔羅の克服はただ悪魔・煩惱の克服を象徴するばかりでなく、魔羅の領域である死の克服という意味も含まれている。伝承によると、成道したばかりの釈尊は転法輪を始める前、「我が説法を聞こうとする人のため、不滅への門を開けて置く」と宣言した<sup>1)</sup>。この概念を受けて、釈尊自身の人生の終りが単なる死としてではなく、不滅への門を開けて置く<sup>2)</sup>た仏として、深く禪定に入ってから始めて入滅するというように、まさにその成道の再演として描かれている。釈尊以外にも、「死んだ」というよりも、永く入定しているとされた上人がいる。日本の例を引けば、最も有名なのは、いうまでもなく、高野山で弥勒仏の降臨を入定して待ち続ける弘法大師空海に他ならない。

では、悟った人は死なないのかという、単純な質問に対しては単純に「死なない」としか答えられない。確かに悟りを得た者もこの世から姿を消す訳であるが、それは輪廻につながる普通の死と全く違い、輪廻から解放された事とされる。そのため、そのような人の死は無余涅槃、入滅、往生等の特別な用語によって表される。更に具体的に言えば、迷った人の死と悟った人の死とは全く別な出来事として区別され、前者は輪廻の繰り返しへと追い戻すものであり、後者は迷い・生死の苦しみを何等かの形で超越した状態として捉えられている。仏教に於ける基本的な理解で、「死」と「生」は同じサンサーラの次元に属するので、死の反対は生ではなく、解脱・救済である。

この迷いと悟りとの区別は、残された死体にまで反映すると広く信じられていた。凡夫、迷った人の屍は、直ぐ腐り、嫌悪感を起こさせるものになるが、仏、聖者、高僧、往生人等の場合は違うというのは、伝記類の仏教文学に共通したテーマである。例えば、平安時代の往生伝に登場する僧尼男女は、死体が腐らずに、数日経ても香ばしい香りを放っていたり、火葬されても臨終の時に手で結んだ印が崩れなかったり、といった叙述が多い。葬儀の中で他人の手で死体を取り扱われる場合にも、聖者の死体と凡夫のそれとは全く違った「振舞い」を見せる。ここで釈尊がバラダームになる。その屍が荼毘に付された時、遺骨の中から仏舍利が出て来た伝承は有名である。

## 二 立派な死に方は悟りの証

もし死が迷いの領域に属し、悟りは死を克服した状態だとすれば、立派な死に方は一つの悟りの証拠となる。プリンストン大学での仏教入門の授業では、学生達から「どうやって人が本当に悟りを開いているかどうか分かるのか」とよく聞かれる。ごく単純な疑問と思われるであろうが、どのような基準によってある個人に宗教的權威を付与するかは、仏教教団の歴史を通じて常に実的な問題であった。例えば、ある法師・坊さんがどれほど煩惱や欲望を断ち切っているのか、本当に悟りを開いているのかは、目に見えない所であって判断しにくいので、その代わりに戒律を厳正に守っている、教学や論議に優れている、高名な師匠より血脈相承を受けたといったような目に見える基準によってその人の宗教的權威を判断するのが普通である。

そうした基準の一つに人の死に方がある。高僧伝、往生伝等の伝記類には必ずといっていいほど、その主人公の死に方が理想的なものとして描写されている。日本中世に焦点を絞れば、平安時代の往生伝では理想的な死の場面が頻りに描かれている。そこに登場する往生人達はその決定往生を暗示するよう、自分が亡くなる日を自然に予見して弟子や家族達に告げ、身体を清め、西に向かって念仏を唱えながら安らかな死の迎え方を示す。そして、息が絶えた後、実際に往生した事の証拠として室内に香氣が立ち込め、光が輝きわたり、空に妙なる音楽が聞こえ、西の方に紫雲が立つ等の瑞相が現われる。理想的な死の迎え方は念仏者に限らず、顕密の各門流に互り、旧仏教・新仏教を問わず重視されていた。また、臨終の時に生前に開いた悟りの証として、一首の遺偈——最後の詩——をその場で作るという、

特に禪の世界で行われた習慣は有名である。それに関しては、源有房のものとされる歌論書『野守の鏡』の中に、遺偈を前もって用意して、臨終の場で作ったふりをした禪僧に対する厳しい批判が見られる。<sup>(3)</sup> また道元も、死の迎え方について、座禪の力によって「坐脱立亡」が出来る<sup>(4)</sup>と述べた。釈尊でさえ、頭北面西右脇臥という姿勢で、体の右側を下に横たわりながら涅槃に入ったと伝えられているので、座つて亡くなり、立つて死ぬという事は釈尊よりも気高い死に方であると言えるであろう。極端な例であるが、宗峰妙超（大燈国師、一二八二—一三三七）は長い間、左の足が不自由で結跏趺坐が出来なかつたのに、最後の時には座禪を組みながら死を迎えようと決意して自分の意志で左の膝を折り、衣をその血で染めながら結跏の姿勢で息絶えた事が伝えられている。<sup>(5)</sup> 勿論、事実ではなく、伝記上の美化されたイメージではないが、このような叙述は素晴らしい臨終の仕方がどれほど強く望まれ、理想化されたかをよく語るものである。

迷いの世界を離れたかどうかを判断する基準として、特に重要視された事の一つは、死に臨む人、そして亡くなったばかりの人の身体の状態である。中世日本の仏教界では死ぬ時に身体に表れる相について説明する經典・論書が目された。その中の一つに『守護国界主陀羅尼經』という經典があり、そこでは、死に臨む人の身体に現われる、地獄に落ちる十五相、餓鬼道に落ちる八相、畜生道に落ちる五相、人界・天界に生まれる各々十相等が子細に列挙されている。<sup>(6)</sup> 例えば、叫び、泣き、涙を流したり、目を閉じたまま開けなかつたり、思わず大小便をしたりする事等は地獄の相とされ、のどが常に渴いたり、身が火のように熱くなつたり、唇をよく嘗めたりする事は餓鬼道の相とされ、荒くかすれた声を出したり、全身より汗を流したり、手足の指を曲げたりする事等は畜生道の相とされた。現代の視点では、病気に伴つた偶発的な徴候としてしか捉えない、これらの現象が全て来世の運命を予言する印として理解された。ちなみに、この『守護国界主陀羅尼經』の一節は、実範（一〇八九—一一四四）、覺鏡（一〇九五—一一四三）、日蓮（一二三二—一二八二）、念阿良忠（一一九九—一二八七）等の様々な人物に広く引用された。

特に著名な僧侶に対しては、その人の修行、仏教の理解、教え方などが正しいかどうか、臨終の様相によって示されると信じられていたようである。この考え方と関連して、人の死に方に対する批判まで時々見受けられる。例の『野守の鏡』には、当時新しく現われた教団である時衆に対する批判の中、その開祖一遍（一二三九—

一二八九）は、命が終る時に紫雲が立ち、蓮華の花が空より降るなどの往生の瑞相が必ず現われるとその弟子達に生前から期待されていたが、実際に亡くなった時は、瑞相もないどころか、その死体の様相があまりにも酷く、誰も見ないうちに早く火葬する以外になかつた<sup>(7)</sup>と書かれている。日蓮は専修念仏を批判した事で有名であるが、その批判は教義上の事にとどまらず、念仏者の死に方にも及び、法然の八十余人の大弟子達は、或いは血を吐き、或いは全身より汗を流し、或いは二週間経つても何の瑞相も現われない、よい臨終の姿を示したのは一人もいなかったとまで書いた。<sup>(8)</sup> このような批判は勿論、論争上のレトリックという面が強いかも、その裏に仏教上の指導者達の評判が彼らの死に方によつても決定されたという事が窺える。日蓮はそれを意識して自分の死に対して「臨終わるくば法華經の名をりなん」と述べた。<sup>(9)</sup>

しかし、臨終の時に示される相に対する心配は僧侶の世界に限らず、在家の人達も自分の親戚の死に方を意識して、それによつてその人が往生したのか、天界に生まれたのか、死後の運命はどうか等と推量しようとした事は、貴族の日記等にもしばしば出てくる。もし人の心の境地が臨終の姿に反映されるとすれば、死とはもはや、ある種のパフォーマンスとなり、自分が死んでからどうなるかという事はばかりでなく、自分の死に方が周りの人達にどう印象を与えるのかという事にまで緊張しなければならなかつたのであろう。

### 三 臨終・中有の流動性

素晴らしい死に方を示そうとするのは、単なる自分の悟りを示すためではない。死という過程——つまり、臨終と中有（死から次の生までの中間の存在のこと）——は生と死との境界を越える、リミナルな空間であるので、そこには流動性があり、死に直面する人の最後の行為や亡者のために行われた供養が来世に大きな影響を与える力を備えていると信じられた。臨終行儀——死に臨んだ時に行う作法——及び葬式や戒名の授受、十三仏事等の追善供養の全ては、死という過程の流動性を前提としている。最後の念によつて来世が決まるといふ考え方は、仏教だけではなく、昔のインド宗教に共通するテーマであつた。例えば、息絶えようとする瞬間に「転輪王になりたい」とか「諸天の中に生まれたい」と強く願つた人は、来世、願つた通りで生まれるだろうと信じられたよ

うである。仏教の場合、人間の最後の念は普通の因果関係、日常的な道德や宗教的行為を越えた、全く別な次元に属するとされた。例えば、浄土教では、『観無量寿経』の「下品下生」のくだりに基づいて、善根を全く積んでない悪人でさえ、もし臨終の時に善知識に会い、その教示によって南無阿彌陀仏を唱えて十念を具足させれば、その念毎に八十億劫の生死の罪も消え、往生も決定すると説く。<sup>10</sup>源信（九四二—一〇一七）はその『往生要集』の中でこの経文を注釈して、最後に唱えた念仏は臨終の心が力強いから、平常の念仏の倍ほど力があると述べた。<sup>11</sup>更に、中世日本では臨終正念は決して浄土教に関心を持った者にのみ重視された訳ではない。例えば、宋代の禅の思想を享受した虎関師錬（一二七八—一三四六）も、臨終の時に全てを空として観念できる人は、普通では、歴劫修行といわれるほど長い菩薩修行を通してしか達成出来ない無生法忍の位に直ぐ至れると、その『病義論』という著作に書いた。<sup>12</sup>

臨終・中有・死後という一連の過程を仏教儀礼の力によってコントロールする方法は色々あった。中世日本で盛んに行われていた臨終行儀はその好例である。臨終行儀は最後の時、自分の心を正し、仏を親相する人は、それによって生死の苦しみを永遠に避け、往生する事も出来るとし、その臨終正念を助ける為の儀式であった。十世紀の終り頃、源信の『往生要集』にはじめて日本に紹介された事は御存知の通りである。<sup>13</sup>その中には、唐時代の寺院の伝統を受け入れて、死にかけている者の扱い方と死を迎える者の心構えが述べられている。印度の祇園精舎で行われたとされる慣習に従って、馴染みのある環境で執着の心を起こさないよう、病人を無常院という別な建物に移し、そこで仏像を安置し、病人をその仏像の後ろに寝かせ、仏像の手に繋がれた五色の糸を握らせる。病人は念仏を唱えながら、阿彌陀仏がその聖衆を伴って来迎する姿を親相すべし、と勧められている。その側にいる看病人——普通は知識や善知識と呼ばれる——が香を焚き、華を散らし、死に臨んでいる人の往生を可能にするための最低の条件とされた念仏十念を成せるように、色々激励すべき事も説明されている。臨終行儀は僧侶と貴族の間で重視されはじめて、それからだんだんと一般社会に流布した。浄土信仰に限らず、各宗派の教義や修行の上でも吸収された。源信以降、十九世紀頃まで、その『往生要集』を手本とした数多くの臨終行儀書が書かれ、また流布した。

臨終に正念を成してそれによって六道輪廻を出離できるという思想は、一方で人々に往生の希望と確信を与えた

であろう。特に、自分の置かれた状況のため、戒律が保てないとか、難しい仏道修行が出来ないといった人でも救われるという、悪人往生論にも通じる所があった。往生伝や説話には人殺しを職業とした武士や、屠畜、漁獵等に携わって悪人とされた人々も、最後の念仏の力によって救われた例が時々登場する。と同時に、臨終は普通の因果関係を越えた、リミナルな空間であるとされたからこそ、怖い面もあった。どんな罪深い人でさえ、臨終正念によって往生できるとすれば、逆に、どんなに信心深く、善根を多く積んだ人でも、最後の瞬間に妄想や雑念が起こつたら、それだけで一生の仏道修行の功德をなくしてしまい、悪道に落ちる恐れもあった。『今昔物語』の中に、最後の念仏を唱えながらも、たまたま柵の上に置かれている小瓶を気が付き、思わずに「此れを誰取らむと為らむ」と思った瞬間に息が絶え、最後の時に執着の思いを起こした為、蛇として生まれ変わった僧の話が見られ、その恐れをよく表す一例である。<sup>14</sup> 仏教は死に臨む不安に対して安心を与えたが、一方でその安心は、死を殊更に怖いものとし、不安を引き起こした後にはじめて提供されたとも言えるであろう。

#### 四 死後の助けは仏教の効力

臨終、中有は流動的な空間であるが、自分の力の及ぶ範囲が限られているので、結局の所は死の過程や死後の運命を宗教儀式の力によってコントロールできるとされた専門家の知恵に頼る事になる。死に臨む人自身の修行が決めるはずの臨終行儀でさえ、この事を明確に示す。源信以降の臨終行儀書を年代順に読む時、特に注目される事は時代を下るに従って病人の側で臨終の儀礼を担当する専門家としての資格と役割が益々要求されるようになる、という事である。死の痛みに負けずに正念が続けられるように病人に正しく教えたり、臨終念仏を唱える事を先導したり、最後の時によく現われる魔の働きを防ぐために修法を行ったりする事等は全て（知識）と呼ばれる専門家の責任となった。特に死に臨んでいる人が意識が乱れたり不覚になったりした場合、（知識）はその代わりに念仏を唱え、悪道に落ちるべき人でさえ、（知識）の称名の力によってその中有にある魂の行き先をかえ、往生させられる事は、鎌倉時代より臨終関係の書物に見られる。死に臨んでいる人が往生できるかどうかは、結局、その本人の修行よりも（知識）の持つ知恵、それに基づいた儀礼の力によって決定されると考えられるよう

になった。

息が絶え、中有に入った段階からは、自分の力では何も出来ず、他人が行ってくれる葬式や追善供養に頼る以外にない。追善供養は原則としては、誰でも行う事が出来るが、俗世間を離れた、解脱の状態に近いとされた人——つまり、僧侶・上人・行者等——を頼めばより効果的であると、広く信じられていた。孟蘭盆会の基盤となった目連尊者の話はこの事を物語っている。神通力第一と呼ばれた目連でさえ、死んで地獄に落ちた母を自分の力で助けられず、僧侶達への供養を通して初めて彼女が地獄の苦しみから救われた。

日本のいわゆる「葬式仏教」は、大体、江戸時代に定着したものとされている。確かに檀家制度との関係で発展してきた、規格統一された在家の葬式は近世の所産であるが、儀礼を通して亡くなった人を助けようとする事自体は、仏教の中心的役割の一つとして、その起源を遙か昔に遡る事が出来る。三橋正氏の最近の研究によると、臨終出家や仏教の追善供養の興隆に見られるよう、「来世を仏教に託そうとする宗教観」は九世紀前半、皇室と貴族の中で始まり、社会に流布した。また中世に至ると大部分の僧侶・僧尼は自分のために悟りを開こうとする修行や学問と論議に励む事よりも、その主な日常的宗教活動が亡者供養であったという事が、西口順子氏等の研究によって明らかになった。貴族、武士達が莊園や他の財産を寺院に寄付したのは、多くの場合、その寺院の僧侶に親戚・先祖の亡者供養を要請するためであった。「死の管理」(death management)——死後を救う儀礼とその儀礼を効果的に行える専門家を備える事——は古代、中世より、仏教教団の最も重要な社会的役割の一つであり、同時にその教団の経済的基盤でもあった。

## 五 結び

人の死の迎え方や死体の様相によってその人の死後の行方が分かる事、臨終行儀、葬式、追善供養等の儀式の力によって、死に臨む人、亡くなった人が救われる事、またその死後を救う仏教儀式の効力等、以上で議論してきた事は日本ばかりでなく、中国、チベット、その他の近代以前の仏教文化では、多少の違いがあつたとしても、一貫した、一つの常識となつていた。現代において、そのような考え方は全く消えてしまった訳ではないけれども、特にこの一、

二世紀ほど、いわゆる近代化との接触で大きな思潮変化が起こりつつあると言えるであろう。現代では、死の迎え方は人の心の境地の証や死後の行方の印として重視する人も少ないであろうし、また重視しても、多くの人が病院で亡くなるので、誰もその臨終の様相を見る事ができない。最近行われた色々な調査によると、他界を信じ、死後を実際問題として考える人が減ってきているし、葬式が必要だと思っている人も、葬式の目的は亡くなった人の魂を静めたり、浄土へ送ったりする事よりも、その人の人生に対して尊敬を表し、遺族を慰める事であると考え、現世的な意味付けをする傾向が高まっている。この思潮変化の中で、葬式や年忌法要を宗教活動の中心とし、それに支えられてきた寺院は生き残れるかどうか議論されている。

この思潮変化を単なる近代化の所産として片付けてしまわずに、仏教の生死観が具体的に、どのような歴史過程を通して変遷してきたかを考証する事によって、宗教的思想と社会的傾向との相互関係が照らし出され、価値のある研究テーマになるであろう。同時に、仏教の生死観はこれからのように変化して行くかという事も興味深い問題である。最近、死んでから地獄や餓鬼道に落ちる事よりも、身体、精神の機能が失われても病院の部屋でチューブに繋がれて否応無しに長く生かされる事を恐れるという、現代人らしい心配に応えたように、六道抜苦の働きがあるとされてきた観音・地藏菩薩が「ぼっくり信仰」の対象となり、患いなしで突然に死ぬという利益を授けてくれる、と信じられるようになった。仏教ターミナル・ケアに関心を持つている人達の中には、実用的なヒントを得るため、近代以前の臨終行儀書を熱心に学ぶ人もいる。伝統的な臨終行儀書から何を取り上げているか、というと、それはいうまでもなく、死を臨む人の正念を助けようとする魔縁を防いだり、その人が三悪趣に落ちないようにしたりする方法ではなく、本人に安心を与えながら、いわゆるQOL(クオリティ・オブ・ライフ)を高め、残された時間をなるべく人間らしく過ごさせ、尊厳死を迎えさせようという、現代的な意味での解釈が出来る部分に焦点を当てている。仏教の生死観は中世、近世と比べて大部変わったが、だからといって、必ずしもなくなつて行く訳ではない。その長い歴史の中で変化に巧みに対応してきた、多面性に優れた仏教であるが、その生死観は予想もしない方向に、これから発展していくのかも知れない。

- 註
- (1) Arivapariyesanasutta, Majjhima-nikaya I, no. 26, p.169(Pali Text Society).
  - (2) 『仏所行讃』巻五、大正四・四九下：『仏本行経』巻七、大正四・一〇八下—一〇九上。
  - (3) 『野守の鏡』群書類従巻四八四、二七・五〇六頁。
  - (4) 『普勧座禅儀』、道元禅師全集（春秋社、一九八八—一九九三年）、巻五・六頁。
  - (5) 『大燈国師語録』巻下、大正八一・三二四上。
  - (6) 大正一九・五七四—中。
  - (7) 『野守の鏡』群書類従二七・四八一頁。
  - (8) 断簡第二〇〇、『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延久遠寺、改訂増補一九八八年）、巻四、二九二—五頁。
  - (9) 『西山殿後家尼御前御返事』、『昭和定本日蓮聖人遺文』、巻二、一九〇—三頁。
  - (10) 大正二二・三四六上。
  - (11) 『源信』、岩波思想体系六、石田瑞麿編（岩波書店、一九七〇年）、二九六頁。
  - (12) 五山文学全集（同刊行会、一九三六年）巻一、二八三頁。
  - (13) 『源信』、二〇六一—二一七頁。
  - (14) 『今昔物語』巻二十、「比叡山横川僧、受小蛇身語」第二十三、新日本古典文学体系三六、小峰和明編（岩波書店、一九九四年）、二七二—二七四頁。
  - (15) 『平安時代の信仰と宗教儀礼』（続群書類従完成会、二〇〇〇年）、五九七—六六八頁。
  - (16) 『女性と亡者の忌日供養』、『仏と女』所収（吉川弘文館、一九九七年）、二二八—二四六頁。

(ジャックリーヌ・ストーン プリンストン大学助教授)